

トレーニー派遣（一日目）

3月12日（水）

今日から、待ちに待った3泊4日のトレーニー派遣プログラムが始まった。

富山空港では結団式を行い、気を引き締めて大連へ向かった。

最初はまだ親しめていないメンバーたちとの行動に不安や戸惑いを感じた。その不安を打ち消すためにも努力して積極的に富山大学のメンバーたちとコミュニケーションを取るようにした。その結果、徐々にその不安も少なくなり、たくさんの笑いがみえ、気持ちが和らいだ。

大連についてまず私たちは、北陸銀行大連駐在員事務所所長の大間知さんの講義を受けた。中国の経済の現状、日本企業の中国内での状態などについて実際に現地で働いている人からお話を伺える素晴らしい機会であった。その講義は私たちの今まで持っていた中国に対するイメージを変えるきっかけとなった。イメージでは、中国企業の反日感情などから日本企業の中国進出はリスクが高いと思っていた。しかしその点について質問したところ、実際は、中国の購買力を考えるとリスクより利益が見込めるということがわかった。また、私たちのイメージでは、中国の富裕層が増加しているために、その購買力が高まり、高価で質の高い日本製品の人気も高まっていると思った。しかし、大間知所長の講義によると、中国の富裕層はあまりお金を使わずに、賢く値段と質のバランスが取れているものを購入しているため、質が高いが高価すぎる日本製品はあまり買われないことがわかった。またその現状を考慮し、増えすぎた機能を削減することによって、コストを落とし、中国人のニーズに対応した日本製品を生産しているとのことだった。

次に大連の街並みについてである。私たちのイメージでは、地域によって貧富の差がはっきりしていると思っていた。しかし、実際に町を歩いてみて、またバスからの景色を見てそのイメージは誤っていることが分かった。都会の高いビルが立ち並ぶ横に、貧困層が住む集合住宅が建っている。その景色は日本では見られないものであり、とても新鮮であった。日本では貧富の差によって住む場所が異なるが、土地の値段が国によって決められる中国では富裕層の横に貧困層が住める。これは実際に自分たちの目で見てもっとも衝撃的なことであった。また、都会の路上でも物を売って生活しているような人がいて驚いた。それから、交通のマナーについても大いに驚いた。歩行者の信号が日本に比べて圧倒的に少なく、日本では歩行者優先社会だが、車優先の社会であるここでは危険な思いをたくさんした。

このように、実際に自分たちでその地を歩いてみて初めて分かることがたくさんある。明日からもすべてにおいて積極的に吸収していきたい。



(大連にて)

文：

人間社会学域・経済学類	1年	堤 桜子
経済学類	2年	宮腰 麻友子
経済学類	2年	山上 一樹

トレーニー派遣（二日目）

3月13日（木）

二日目終了！！今日の午前中は3社の企業視察に参加し、夜は夕食をとってからの雑技団の京劇やマジックなどを鑑賞してきた。

企業視察一社目は YKK ファスナー現地法人。期待に胸をふくらませてやってきた私たちを「你好！！」とあたたかく迎えてくれた。工場長さんは概要について話してくれた。会社のスローガンは「変化の中にチャンスあり」、これは変化の激しい中国の競争社会で生き残るコツを意味している。社会貢献、社員の幸福、利潤の追求、顧客の満足、この4つはファスナーのようにつながっており、どれか一つもおろそかにできないと言っている姿は頼もしさを感じた。私たちが、特に印象的だったのは日本人上司と中国人社員の中に信頼関係がみえたことだ。学生の中で「上司に対して不満があるか」という答えにくい質問が中国人社員さんになされた。その際に彼女たちは少し戸惑いながらも、上司に対して日本のルールが多さと厳しさなどを指摘して、それに対して上司の方も堂々と返答していた。その姿に言いたいことを言い合い、お互いに相手が自分の意見を受け止めてくれるという信頼があるように思えた。



（YKK ファスナーにて）

二社目は大連ソフトウェアパーク（DLSP）。3㎢という広大な土地に400社もの会社が設立されている。人件費を削減するために日本限らず、世界中の業務を委託されていることに驚いた。医者のカルテのデータ化やコールセンターなどといった単純な業務であるが、高い専門性が要求される。



（大連ソフトウェアパーク（DLSP）にて）

最後は YNC。この会社の業務は専門性が高く、競争相手が少ないため、離職率が低い。工場見学の際に「安全生産」という看板があって、ひとりひとりの名前がかいてあり、社員各々が安全な商品生産を心がけることができる環境がつけられていた。入口付近には数々の感謝状が飾られており、社会貢献によって地域に根付いていることが感じられた。近年の日中関係の悪化によって中には中国を撤退していった企業も少なくないが、今日見学してきたような企業も存在する。その違いは何なのか。真の意味で中国に根付くとは、中国で競争すると決めた以上は中国の法律やルールを守る

ということ、中国の同じ土俵で戦おうとする意志をもつということではないかと思った。
夕食のあとは中国雑技団の技を拝見し中国文化にふれた。何を言っているかわからなくても、楽しく鑑賞できた。国家間ではなく民間の個人レベルでの交流が、草の根交流となり最終的な日中関係の解決につながる可能性を感じた。



(中国雑技団)



(大連にて)

文：

一岡 真美
小楠 卓司
藤田 はるひ

トレーニー派遣（三日目）

3月14日（金）

大連理工大学との交流から始まったトレーニー3日目。私たちが最も楽しみにしていたプログラムである。始めに大連理工大学の方から英語のスピーチがあったが、まずその流暢さに驚いた。企業訪問とは違い、目の前にいるのは自分たちと年齢も変わらない学生ということで非常に刺激を受けた。交流の際も日本語学科の人びとは非常に流暢な日本語を話しており、中国語・日本語・英語の3つの言語を巧みに操るその姿に、近年、世界を相手に中国が躍進する、その大きな力を感じ取ることができた。交流する前は、中国の学生は勉強を中心とした学生生活を送っていると思っており、実際にそのような学生は多い。その中でも日本に興味のある学生は、日本の学生がアルバイトをしたり、サークルをしたり、勉強以外の活動を学生時代に経験することに憧れを持っており、私たちは意外に感じた。

交流を通して一番感じたのは「中国人」としてではなく、一人の人として相手に接していくことが重要であるということである。大連に行く前に、学生との交流の際にする質問をあらかじめ考えていたが、すべての質問の主語が「中国人」になっていて、いかに自分たちが「中国」というくくりの中で相手をみようとしていたのかに気付かされた。もちろん相手は中国人なのだが、それぞれにそれぞれのバックグラウンドがあり、考え方も違う。日本人外国人に関わらず、もっと個人を尊重し向き合うことこそがお互いをより理解することにつながると感じた。



（大連理工大学）

交流会の後は日露戦争の舞台となった旅順の視察を行った。実際の大砲の跡や復元された砲台を見て、実際にこの場で日本とロシアが戦ったという歴史を直に感じる事ができた。

そして、今回トレーニーの最終プログラムである富山大学・金沢大学合同校友会。かつて金沢大学や富山大学で学び今は大連で活躍されている方々の話を聞く貴重な機会を得られ、ビジネスのことや留学がどのように人生に影響したかなど具体的に知ることができた。



（富山大学・金沢大学合同校友会）

今回聞いたことを無駄にせず、自分たちの将来の糧にできるよう努力していきたい。
海外で働くことが研修前より具体的になり、自分たちの新たな将来の可能性が切り開かれた。

文：

電子情報学類 3年 山田義彦
経済学類 2年 田口皓章
地域創造学類 2年 堀有香里
国際学類 2年 荒木美紀